

由岐神社拝殿の平面・軸部・組物における寸法構成に関する一考察

懸造り建築の基本構成に関する基礎的研究 8

Case study of Yuki-jinja Haiden

A study on the style and characteristic of “KAKEZUKURI” in Japan

○河合 晴香<sup>1</sup>, 重枝 豊<sup>1</sup>

\*Haruka Kawai<sup>1</sup>, Yutaka Shigeeda<sup>1</sup>

1. 由岐神社拝殿の概要

由岐神社は京都府左京区鞍馬にある鞍馬寺の鎮守社で、「王城北方の鎮めとして、天慶3年(940)に靱大明神(後改め由伎更に改め由岐)を奉祀し大己貴命(おこなむらのみこと)、少彦名命(すくなひこなのみこと)二座を鎮奉」<sup>i</sup>されたとある。

拝殿は高欄擬宝珠銘から慶長15年(1610)豊臣秀頼の再興であることが分かっている<sup>ii</sup>。

2. 建築概要

由岐神社拝殿は桁行六間梁行二間入母屋、檜皮葺で南面する。東より三間目に馬道と呼ばれる通路を通す割拝殿である。

屋根は桧皮葺き、箱棟で妻は扱首束立てで懸魚がつく。軒は二軒疎垂木で、馬道上は屋根中央部に唐破風が付き、天井は輪垂木である。軒桁は側柱上舟肘木で受け、輪垂木は臺股で受ける。柱間は、長押から軒桁までは四面いずれも板壁外漆喰仕上げで、馬道両脇に腰高の板壁が張られ、他は吹き放ちである。縁は切目縁で、北面以外に高欄が立つ。懸造部は柱に貫が梁行きと桁行きに通っており、柱上に土台を組んで束を立て、大引きを受ける。通し肘木上に皿斗が二つ乗り、実肘木を受けて壁付方向に出た土台と、土台に直行する絵様肘木を受ける。土台は、皿斗を二つ乗せて、縁中央と縁外より二本の縁根太を受け、先は拳鼻である。絵様肘木上には皿斗がのり、縁中央の根太を受ける。地盤は北面、西面から南東へ傾斜して石垣で段状になっており、馬道部分には石階段で、建物の床面は懸造りによって支持される。

本稿では明治43年の図面を用いて、指定当時の平面・立面・断面の部材構成や寸法について分析を行い、その特徴を明らかにしたい<sup>iii</sup>。

3. 平面の寸法構成について

柱間寸法は、梁行柱間は中央柱筋が2間とも7尺で、馬道を挟んで東側が7.03尺と7尺、東側面が7.017尺と7.005尺、西側面は6.98尺と7.025尺である。桁行柱間は、馬道が9.765尺、南面は西から6.56尺、7.02尺、

7.06尺、馬道を挟み、7.01尺、7尺であり、北面は西から2.4尺、7.93尺、7.93尺、2.57尺、馬道を挟み、7.015尺、7.045尺である。南面西端間と北面馬道より西側を除き、7尺~7.06尺である。

柱はすべて面取り角柱で、土台上に立つ。寸法は(表1)の通りである。

|   | 西   |     |     |     | 馬道  |     |     | 東   |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 北 | 5.7 | 5.6 | 5.6 | 5.6 | 4.7 | 5.2 | 5.● | 5.6 |
|   | 4.5 |     |     |     | 4.9 | 5.5 |     | 5.8 |
| 南 | 4.7 | 5.0 | 5.0 |     | 4.8 | 4.8 | 5.7 | 5.7 |

表1 柱寸法値 単位は寸 (解読不能は●表記)

縁は切目縁で、西側面と馬道を除いて三面に廻り、北面を除いて高欄が立つ。縁板の出は西南面が4.65尺、東面が4.5尺、北面東側が4.58尺、北面西側が3.285尺である。柱心から高欄までの寸法は、南面西側の側面が4.08尺、馬道面が4尺、南面東側面が3.89尺、東面は3.72尺である。

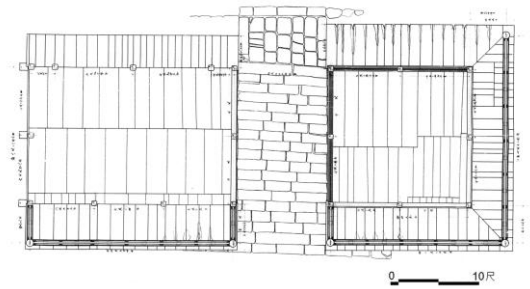


図1 平面図(注)

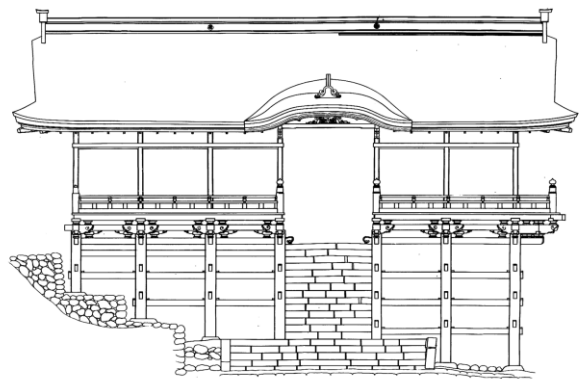


図2 南立面図(注)

1: 日大理工・教員・建築

平面については、南面西端間と北面馬道より西側以外では 6 分までを誤差の範囲内と判断すると、7 尺での計画が考えられる。南面西端間については他の南面柱間と支数が等しいため、分割の寸法が他より狭い。縁の出についても、柱間で完数をとる馬道西よりの柱筋では高欄柱までが 4 尺と完数である。

#### 4. 軒と軸部の寸法構成について

軒は、桁行方向では地垂木が小屋組み内部まで入り、飛檐垂木は木負から先に出て桔木によって吊られる。一方、梁行方向では地垂木は軒桁から先に出ており、小屋組み内部まで入っていない。軒の出は正面地垂木 3.29 尺、飛檐垂木 2.9 尺、背面地垂木 3.3 尺、飛檐垂木 2.05 尺である。側面では、西面地垂木 3.75 尺、飛檐垂木 2.75 尺、東面地垂木 3.27 尺、飛檐垂木 2.03 尺である。これらから、地垂木の出は西面を除き 3.3 尺であり、飛檐垂木の出は背面と東側面が約 2 尺である。

軸部は、切目長押は 0.6 尺、腰貫高は 2.52 尺、腰貫から内法貫までの高さは 3.57 尺、内法貫が 0.1 尺巾で、床から内法貫下端までは 6.1 尺である。内法長押巾は 0.41 尺、軒桁までの高さは 1.5 尺、軒桁巾は 0.4 尺であるから、天井高は 8.5 尺である。

床は梁行き方向に張るので、根太は桁行に通り、土台に東を立てて支える。

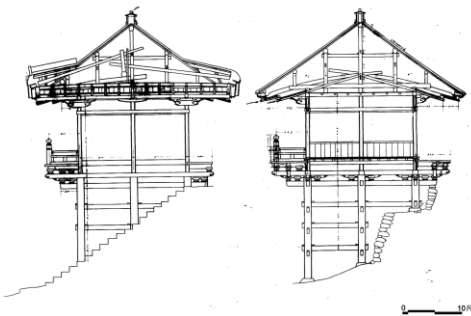


図 3 梁行断面図 (左：馬道部、右：内部)

#### 5. 腰組斗拱の寸法構成について

縁は腰組によって支えられており、柱真から勾欄柱真までは 4 尺で、持ち送り斗拱一手目は通し肘木、その上には 2 つのり、実肘木を受け、その上に土台がのる。土台は勾欄柱下まで延び、皿斗がのり、縁框を受ける。土台の木鼻は丸みがあり、中央が山形の鑄をもつ禅宗様の木鼻である<sup>iv</sup>。



写真 1 南面縁の持ち送り斗拱 (2009. 11. 20 撮影)

通し肘木の先端皿斗には土台と直行し、実肘木と土台を合わせた高さの絵様肘木がのる。隅斗拱では桁行と梁行の肘木が合う隅行き方向土台上に、皿斗がのる。

懸造部の柱は面取りのない角柱で、巾は 8.5 寸から 1 尺である。通し肘木の高さは 6.5 寸、その 7.5 寸上に高さ 5.6 寸の土台がのる。懸造部の斗は総て皿斗で、巾・長さは 9 寸である。

#### 6. 分析結果

寸法構成については、平面柱間寸法・縁の出・柱幅と軒の出、軸部の天井高は尺の完数で計画したことが伺える。腰組斗拱については柱幅と皿斗の寸法がほぼ同寸であることが確認された。また、上屋は疎垂木、棹縁天井、舟肘木と軒廻りが和様の簡素な意匠であるのに対し、馬道は唐破風・輪垂木・藁股、腰組は土台や通し肘木で二手先に見せ、実肘木木鼻に禅宗様意匠を用いる。

このように、寸法構成と意匠においては、建物の内部空間と、馬道を含む外部空間に差異が確認された。

#### 7. まとめ

由岐神社拝殿は慶長の建立時に建部光重が奉行となって再建された。寺家大工や地元大工が主体となって作事を行ったと推測されて、同奉行の醍醐寺如意輪堂では、豊臣方大工による施工であることが分かっている<sup>v</sup>。堂の性質、上屋の意匠や規模・平面構成は異なるものの、床や縁の支持に土台・通し肘木を用いること、地盤を石垣で組むこと、腰組と軒で斗拱の意匠が異なることなど、共通した要素が確認された<sup>vi</sup>。これらの要素は上醍醐青瀧宮拝殿にも共通しており、これらが建部光重の奉行による事例にみられる特徴であるかは未だ判断がつかないが、他にも上屋と懸造部の意匠や寸法構成が異なる事例が確認されるのか分析を進めていきたい。

<参考・引用文献>

- [1] 『鞍馬寺史』大正 15 年 3 月 10 日発行橋川正・著鞍馬山開扉事務局出版部・発行[2] 「豊臣秀頼の寺社造営について」木村展子『日本建築学会計画系論文集』第 499 号、pp.171-177,1997.9[3] 「豊臣秀頼の作事体制について」木村展子『日本建築学会計画系論文集』第 511 号、pp.185-192,1998.9[4] 『古建築の細部意匠』近藤豊、1972、大河出版
- (注)：図 1～3 は明治 43 年「文化庁実測図台帳」より引用

<sup>i</sup> 由岐神社境内の解説に基づく。

<sup>ii</sup> 参考文献[1]による。

<sup>iii</sup> 2009 年の現地調査では、北面西側の柱配置や腰組の斗の配置、西面の縁の有無など図面との相違点が確認された。現宮司は、図面の状態では見たことがなく、現状は平成 16 年に腰組や懸造部分の根継ぎなど、修理を行ったそうである。京都府文化財保護課によると、部分修理のために報告書は作成されなかったとのことである。

<sup>iv</sup> 参考文献[4]pp.68 禅宗様系木鼻の項を参照した。

<sup>v</sup> 参考文献[3]による。

<sup>vi</sup> 「醍醐寺如意輪堂の立面と縁の構成に関する一考察」2012 年日本大学理工学部学術講演会にて口頭発表。